

No. 3 : タイの食品見本市

1年ぶりに訪れた「ほほ笑みの国」タイは、日本からの農林水産物・食品輸出額で第7位を占める主要市場の一つである。

5月26日から30日にかけて、バンコクで東南アジア最大級の総合食品見本市「THAIFEX-Anuga Asia（タイフェックス・アヌーガ・アジア）2026」が開催され、本県もブースを出展した。

季節は暑季から雨季への変り目。強烈な日差しとスコールの気配が漂う中、巨大な会場内は世界50以上の国・地域から約3千の出展者と延べ10万人に上る来場者の熱気に包まれていた。日本貿易支援機構（ジェトロ）のジャパンパビリオン内に設けた本県ブースには、小山市の「おばねや」と宇都宮市の「熊本養魚場」の2社が参加した。

おばねやの漬物はタイや香港をはじめ世界各地で展開されているが、今回は新商品「和の極み」シリーズなどでの販路拡大を狙った取り組みだ。日本食品を取り扱うタイ国内のバイヤーに加え、周辺国からの引き合いもあり、手応えを感じる結果となったようだ。

熊本養魚場は昨年に続く参加。地下水で養殖したアユやヤシオマス、アユ飯おにぎりを売り込んだ。バイヤーからの引き合いだけでなく、タイで日本関連の見本市を主催する事業者から出展の打診もあったという。海なし県の水産物、今後の展開に期待がかかる。

会場全体を見渡すと、昨年と比べ二つの変化が感じられた。

第一に、中東や欧州からのバイヤーが減った印象を受けた点だ。中東情勢や航空運賃高騰の影響なのか定かではないが、商機の面からも、再び世界中のバイヤーが行き交う場になることを願いたい。

第二は「抹茶」人気である。原料不足も懸念されるほどの世界的なブームとなる中、それを裏付けるかのように関連商品が多くのブースに並んでいた。市内の日系商業施設内にも専用コーナーが設けられ、その人気の高さがうかがえた。

この間、香港でも二つの動きがあった。まずは香港国際空港での第2ターミナルの運用開始。香港エクスプレスなど一部の航空会社が移転しており、来港の際は留意されたい。

また当事務所も湾仔から一駅隣の銅鑼灣へと引っ越した。共同で事務所を設置するジェトロ香港の移転に伴うものだ。心機一転、まずは目の前に積まれた段ボール箱の片付けから始めたい。



【タイフェックス 2026 の本県ブースの様子＝5月、バンコク】

県香港事務所長 すずきたかあき 鈴木高明